

ロシア語研究最前線



海外交流

上原 順一*

About my experiences acquiring a degree in Russia

Key Words : degree, Russia, kandidat nauk, Ph.D

ロシア語を教え始めて数年経過したとき、決意しました、このような職を与えて頂いているのだから、ロシアでロシア語または言語学の学位をとろうと。拙文はこの経験談です。学位記の日付は2002年4月19日で、とても「最前線」とは言えません。まずこの点をお詫びいたします。当時と現在とでは制度や事情は変わっていることでしょう。ただ、その頃は経験をうかがう機会も少なく、たびたび不安になりました。情報が少ないのは今でも同じですので、情報源・記録として少しでもお役に立てばありがたいと思います。

私が日本の大学で頂いていたのは修士号です。これが、ロシアの制度ではどの学位になるかを確認する必要があります。このすぐ上の学位を目指すのが正しい道だと考えられるからです。ロシア語、言語学、文学…いずれの先生方に質問しても答えは同じ、「日本の修士号はロシアの修士号だろう」後日、念のために、日本の修士課程修了証明書(英語版)をモスクワで公証翻訳してもらったところ、やはり修士号だと認定されました。このすぐ上で、目指すべきはkandidat naukになりました。これは「博士候補」と和訳されることがあります。「候補」というのがややこしい単語ですが、「Ph.D」に相当すると考えられています。そして、さらに上に doktor nauk 「博士」があります。日本の博士や Ph.D の

上位にあると考えられるので、「超博士」と言った感じでしょうか。最終的に頂いた学位記自体は英語で書かれており、そこには"DOCTOR OF PHILOSOPHY (Ph.D)"とあるので、やはり、kandidat nauk は Ph.D なのだと思います。

Ph.D 取得でもっとも重要な手続きはもちろん論文執筆でした。ただ、おそらくどんな場合でも人との出会いは非常に多くのことを決定づけます。学問では指導して下さる先生との出会いです。私の先生はロシア科学アカデミー言語学研究所の Elena Kubriakova 博士でした。先生が国内外への出張や授業、研究でご多忙なのは存じ上げていましたが、言語学研究の第一人者ですし、お願いのでしたらこれほどありがたいことはありませんとの思いを率直にお伝えすると、ご快諾くださいました。先生との出会いは私の人生を変えたと言えます。永遠に感謝しています。

論文執筆は、私が書いた部分を先生に見て頂く形で進みました。ご自宅やおつとめだった研究所だけではなく、ときには休暇を過ごしていらっしやっただけにも私が原稿や資料をもって伺いました。先生はそれに鉛筆でチェックを入れ、加筆・補筆すべき内容をメモや口頭でくださいます。後者の場合は実に貴重なディクテーションになりました。このような作業を何十回していただいたことでしょうか。とくにうれしく思い出すのは別荘です。モスクワの中心部から鉄道で郊外の駅まで行き、そこから徒歩で1時間ほどのところにありました。自然が豊かなロケーションというよりは、自然の中に人が住んでいるという表現が的確でしょう。ここで勉強に集中する機会を与えていただいたこともありがたいです。

長い論文をロシア語で書き続けるのは、心身ともに困難な仕事でした。少しでも楽になるように工夫したことがあります。頭の中の言語が、日本では日



* Junichi UEHARA

1965年10月生

The Institute of Linguistics, Russian Academy of Sciences, Ph.D in Philology. (2002年)

現在、大阪大学 言語文化研究科 教授
Ph.D ロシア語学

TEL : 072-730-5312

E-mail : uehara@lang.osaka-u.ac.jp

本語で、ロシアではロシア語であるせいか、日本ではロシア語で書きにくいのです。これに気づいてからは、日本での執筆は少ないめにとどめておき、大部分はロシアで書きました。

さて、審査までに通過するべきことが、学位論文の提出以外にもありました。ここでは、2つあげます。まず、kandidatskij minimum という一連の試験に合格することです。科目は、哲学、専門科目（私の場合は言語学）そして外国語でした。哲学の出題範囲としてもらったメモには、古代ギリシア・ローマ哲学、マルクス・レーニン主義などなど実に多様な項目がありました。ロシアの教育課程で提供されている哲学を試験勉強するのは、さすがに骨が折れます。私はかなりおまけしていただいたと思います。専門科目は2人の試験官による口頭試問でした。外国語の試験は何語（なにご）を受ければ良いのでしょうか。それは、ロシアから見ての外国語なので、私の場合は日本語で良い…ということにはならず、ロシア語を指定されました。一連の試験では、このロシア語が労力的に時間的に最もたいへんでした。レポートの提出、専門的な文章の書き写し、文章読解と口頭試問が課せられました。

あとひとつ大きな作業がありました。それは、執筆した学位論文の要旨冊子を作成することです。この冊子は avtoreferat と呼ばれています。A5版で表紙も含めると23ページになりました。この機能は、まず論文の要約を多くの方々に知ってもらうことですが、それだけではありません。表紙には、著者や学位論文のタイトルの他に、専門が記されています。私の場合は、専門の名前として「言語理論」があり、共に"10.02.19"なる数字が書かれています。これは、専門を表す番号で、学術専門分野の明細表で規定されています。表紙裏には、研究が行われた組織や部門、指導教員、論文が閲覧できる場所など以外に、公開論文審査（zashchita、「防衛」）が行われる場所・日時も記されています。つまり、この要旨は、論文そのものの他に審査についての情報も提供するわけです。この性質上、審査の日よりもかなり前に研究

所から図書館などに送付されました。opponentの先生方には論文本体と共にお渡ししました。この先生方は、審査前に論文を読んで、審査の場で意見・批判・助言をくれる方々のことです。E.Petruxina先生（スラブ語学、言語学）、A.Solntsev先生（日本語学、言語学）が担当してくださいました。心から感謝しております。先生方の意見書は審査以前に書面でいただき、自分なりの回答を準備する時間が与えられました。とはいえ、当然のことながら、審査では意見や回答は口頭で行われます。原稿には息継ぎの印、イントネーションの上げ下げなどを細かく記入し、何度も練習したことを覚えています。審査には無事に合格しました。

実は、審査以外のイベントがまだあったのです。それは、審査直後のお食事会です。これは伝統になっているようです。ご足労いただいた先生方をおもてなしすることが目的なのだと思います。この準備はかなりたいへんでした。公開審査ということもあり、いらっしゃるみなさんの人数は事前には正確には把握できません。かなり多い目に用意したと記憶しています。もちろん、審査の前日に自宅でサンドイッチ、サラダなどを数十名分作り、飲み物は当日の朝にスーツケースに詰めてひとりで地下鉄で運ぶというのはさすがに非現実的なので、モスクワ滞在中の友人たちに手伝ってもらいました。しかし、合格するのかわからないまま食事を用意するのは、やや複雑な思いでした。

肝心の学位記ですが、その場でいただけるわけではありません。後日、学位記ができたので取りに来るように連絡がありました。そのころ私はすでに帰国していたので、通知書をもってモスクワに飛び、Supreme Attestation Commission という組織に出向き、学位記を受け取りました。これで、ロシアで学位を取得する目的を達することができました。

Kubriakova先生は2011年ご逝去になりました。教えていただいたこと、ご親切にいただいたことに深く感謝し、教育・研究の場で思い出さない日はありません。